特定非営利活動法人さんまクラブ　ニュースレター（季刊）

2014年１月１０日発行　創刊号

さんま

時間 空間 仲間

特定非営利活動法人　さんまクラブ

ニュースレター

創刊号

責任編集：大川大地

巻頭言

理事長：谷村徳幸

明けましておめでとうございます。

皆様のご支援によりまして、「特定非営利活動法人　さんまクラブ」は、年の瀬も押し詰まった１２月２０日にようやく設立されました。ここに感謝をもってご報告させていただきます。今年も引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

さんまクラブは、昨年５月から手さぐりで始動してましたが、いよいよ２０１４年４月より本格的に活動を開始します。今は余念なくその準備をしております。初年度は、土曜日の児童館事業＝土曜さんまクラブと、水曜日・金曜日の放課後学童クラブ事業＝放課後さんまクラブを中心に活動を開始します。週３日の活動ですが、自分たちの実力にあわせて、無理なくゆったりと始めていきます。それがさんまクラブらしいと思っています。

さて、私がここ水口に牧師兼園長としてやってきたのは、小泉純一郎が総理大臣になった２００１年４月のことでした。小泉政権は「構造改革なくして景気回復なし」とか「自民党をぶっ壊す」などのワンフレーズで高い支持率を維持していました。この政権はその高い支持を後ろ楯にして、有事法制を整備し、アメリカに盲従して自衛隊をイラクに侵攻させてしまいました。また数年後、イラクにいた日本の民間人をイラク人が誘拐・拘束し自衛隊の撤退などを求めた一連の事件をきっかけにマスコミなどが“自己責任”を恣意的に強調しました。さらにこの頃“格差社会”が流行語大賞の候補になる程に様々な格差が広がっていきました。

水口に来てからの１３年間の世相を表わす言葉に私は暗澹たる気分になります。“リストラ”“非正規雇用”“自己責任”“貧困”“フリーター”“ニート”“ヒルズ族”“格差社会”“排外主義”“世襲”“すべり台社会”“無縁社会”“いじめ”“被曝”“除染”等々です。これら一つ一つは一見別のことのようにみえますが、通底していると私は考えています。

そんな折り２０１１年３月１１日に東日本大震災が起きました。未だに復興の目処すらたっていません。３・１１を契機にそれまでの価値観が根底から問い返されたはずです。にもかかわらず「戦後レジウムからの脱却」「美しい国ニッポン」を連呼していた小泉の後継の安倍晋三を、去年、総理大臣に返り咲かしてしまいました。「努力する者が報われる社会」「ニッポンを取り戻す」「アベノミクス」と小泉同様耳触りのよいワンフレーズでこの国の舵取りをし、誰も頼んでもいない、公約にもない特定秘密保護法を強行採決し、警察国家

にしようとしています。いよいよアメリカの子飼いになって戦争のできる国づくりを確実に進めています。格差も益々大きくなっています。この閉塞感、行き詰まり感はなんでしょうか。

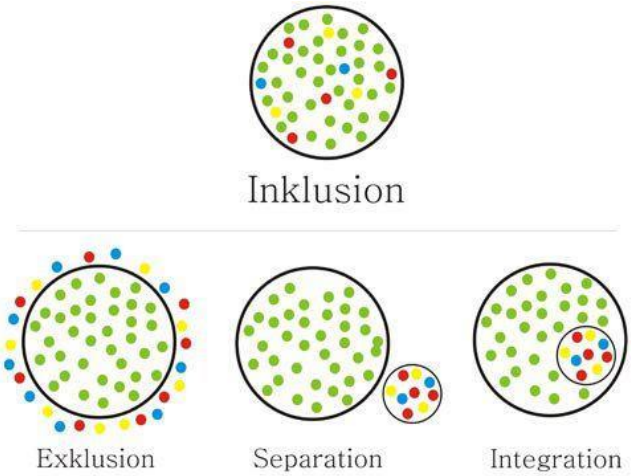
ニュースレターの創刊号、しかも新年の巻頭言に、なぜこんな政治的な、しかも暗いことをダラダラと書くのかといぶかしく思われる方もいらっしゃると思います。しかしさんまクラブの設立にはこれらの事柄と大いに関係があります。かといってさんまクラブが政治運動を起こして世の中を変えようなどと大それたことを考えているわけではありません。こんな世の中だから、落ちこぼされた人、弱くされた人、貧しくされた人、居場所を奪われた人が多く生みだされます。そういう人たちが、楽しく幸せに生きていく「場」が必要だと思うのです。この居場所づくりこそが、さんまクラブの大きな役割の一つだと考えています。

定款に、さんまクラブの目的を次のように定めました。ここにさんまクラブがつくりだそうとする「場」の方向性が書かれています。

第３条　この法人は、今の時代を生きる人々になくなってしまったと言われる「居場所」＝「さんま(時間、空間、仲間)」を創造、提供するために、地域の人たちに対しての子育て支援事業等を中心にして、インクルーシブ(内包的)社会の実現に寄与することを目的とする。

さんまクラブは、「インクルーシブ（内包的）社会の実現」をめざしています。強者が弱者を蹴落とす社会ではなく、共に生き、共に支え合い、共に育ち合うような社会です。

“インクルーシブ教育”ということが日本でも最近ようやく耳にするようになりました。文科省が使い始めるまでは、この２０年くらい“インクルージョン”と言っていました。日本では内包教育とか包括教育と訳されましたが、私は「共生共育」と訳したら内容的に分かりやすいと思っています。インクルージョンとは、簡単にイメージすると右図のようになります。ちなみにこの図はＦＢ（フェイスブック）の“友だち”がアップしてくれたもので、分かりやすいのでよく使わせてもらっています。ここでの表記はドイツ語ですが、インクルージョンが英語なので全部英語読みします。なお、「＝」のあとの言葉は、その“友だち”の解説です。この図で点は人を表わしています。世の中には、様々な色の人（点）がいるわけです。下段の左は、Exclusion（イクスクルージョン・排除）＝お前らいらない、です。下段の真ん中は、Separation（セパレーション・分離教育）＝存在してもいいけど隔離ね、です。下段の右は、Integration（インテグレーション・統合教育）＝中に入ってもいいけど隔離ね、となります。そして上段が、Inclusion（インクルージョン・共生共育）＝みんな一緒だね、のイメージ図です。



つまり社会には、老若男女、障害がある人もない人もいます。能力のある人もない人もいます。国籍も民族も違う人もいます。セクシュアリティも人の数ほどあります。それらの人々が同じ「場」で支えあいながら生きていくことがインクルージョンです。当たり前のことです。

イメージ図では数種類の色で人を表わしています。人は、様々な特徴と個性と課題を持ち合わせており、一人ひとりみな違います。そしてその人は、絶対に一人で生きていくことはできません。一人ひとりが生きていくためにお互い同士、支え合わなければなりません。一人ひとりが生きていくために、人は必ず何らかの助けを必要としているのです。その一人ひとりの異なった助けのニーズがあることを認識し、支えあって、協力し合って、分かち合って生きていく社会がインクルーシブな社会です。さんまクラブは、この地域がそのような社会になっていくために、まずは子どもの居場所づくりから始めようとしているのです。

2014年１月１０日発行　創刊号

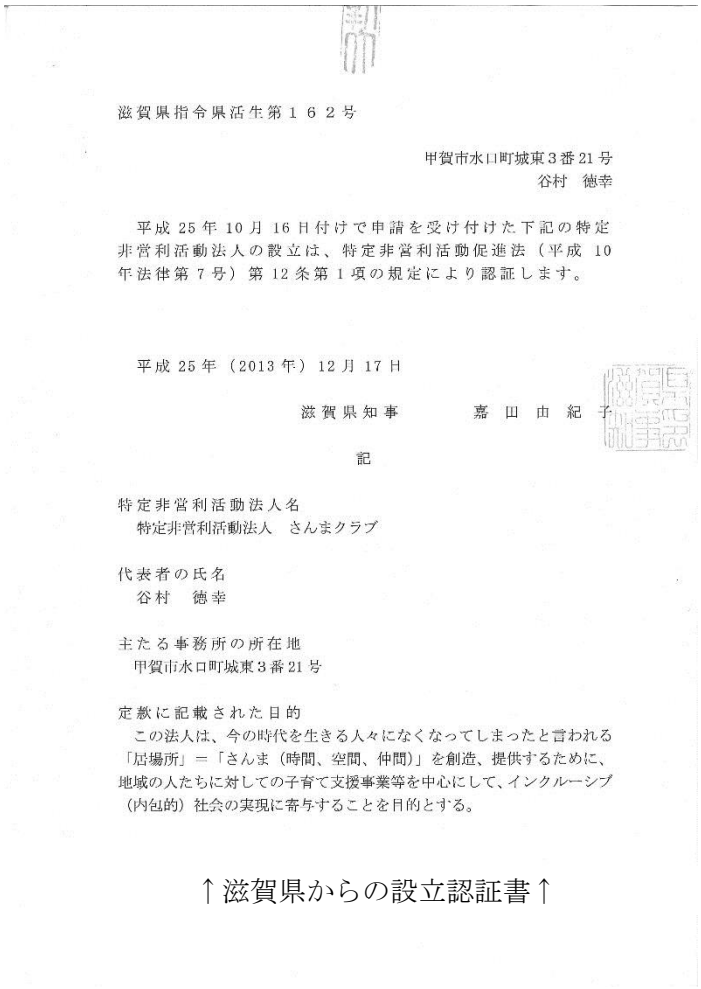
創刊号でいきなり大言壮語に聞こえてしまうような生意気を申し上げてしまいました。でも、この目的を絵に描いた餅に終わらせるわけにはいきません。閉塞感のあるこの社会にあって、さんまクラブは、まずは子どもの居場所（さんま）を取り戻していきます。少しずつではあったとしても着実にやっていきます。スタッフの若い人たちも私自身も先程のイメージ図で言うと、どちらかといえば若葉色ではなく、赤や青や黄色の点だと自覚しています。しかしだからこそ、弱くされ、仲間からはみ出された人、貧しくされた人、落ちこぼされた人などに共感できるはずだと確信もしています。その意味でさんまクラブにはふさわしいスタッフが与えられいると思っています。さんまクラブは、今の日本の政治・経済・教育・社会の状況を憂えています。だからこそ自分たちの地域でしっかりと人間の居場所を確保していきたいと願っています。この活動は平和をつくりだす活動へと続いているに違いないとも確信しています。

さんまクラブは、０(ゼロ)からの出発です。居場所づくりといいながら自前の「場」がありません。原資もありません。あるのは若い人たちの希望と熱意だけです。新たに始まるさんまクラブの働きをご理解いただき、より一層のご支援、ご指導、ご鞭撻を賜りますようにお願いを申し上げて、巻頭言とさせていただきます。

重ね重ねご支援をよろしくお願いします。

さんまクラブ、ついにNPO法人になりました！

前号でもお知らせしていましたように、さんまクラブの NPO 法人申請書類が滋賀県にて縦覧中でしたが、12 月 16 日に縦覧が終了、翌 17 日に滋賀県より認証されました。12 月 20 日に大津法務局にて法人登記申請、25 日には法人登記手続きが完了し、26 日に再び滋賀県庁に登記完了の手続きを済ませました。したがって、これで法人設立にかかわる法的手続きはすべて終了したことになります。登記申請をした日が法人の設立日、と法律で定められていますので NPO 法人さんまクラブの設立日は <u>12 月 20 日</u>となります。理事長の最初の構想から 10 数年、スタッフ４名が準備を開始して 10 か月。晴れて、私どもは「特定非営利法人さんまクラブ」になりました！！今までお支え下さいましたすべてのみなさまに深く感謝いたしますと共に、今後も今まで以上のご支援のほどをどうぞよろしくお願いいたします。



滋賀県指令県活生第１６２号

甲賀市水口町城東３番21号
谷村　徳幸

平成25年10月16日付けで申請を受け付けた下記の特定非営利活動法人の設立は、特定非営利活動促進法（平成10年法律第７号）第12条第１項の規定により認証します。

平成25年（2013年）12月17日

滋賀県知事　　嘉田由紀子

記

特定非営利活動法人名
特定非営利活動法人　さんまクラブ

代表者の氏名
谷村　徳幸

主たる事務所の所在地
甲賀市水口町城東３番21号

定款に記載された目的
この法人は、今の時代を生きる人々になくなってしまったと言われる「居場所」＝「さんま（時間、空間、仲間）」を創造、提供するために、地域の人たちに対しての子育て支援事業等を中心にして、インクルーシブ（内包的）社会の実現に寄与することを目的とする。

↑滋賀県からの設立認証書↑

さんまの本棚　～こんな本、読んでみました～

アルノ・グリューン『私は戦争のない世界を望む』

村椿嘉信／松田眞理子訳、株式会社ヨベル、2013

何とも気恥かしいタイトルである。「私は戦争のない世界を望む」。胸を張って堂々と、こんな当たり前のことを言うことが恥ずかしくなるような暗い時代を誰もが生きている。そしてつい最近、未来はもっと暗くなってしまった。特定秘密保護法案なる分かれ道をなんなく通過してしまったこの国では、そのうち「私は戦争のない世界を望む」なんてことを言ったらそれだけでしょっ引かれるような時代がくるのかもしれない（心配し過ぎだろうか？）。私が望んだくらいでは何も変わらない。そうため息をつきたくなるような時代を私たちは生きている。

『私は戦争のない世界を望む』。この本には、戦争のない世界を実現するためのアイデアや秘策が書いてあるわけでもなく、特に目新しいことも書いていない。「戦争は、避けられる。それは私たちが考える以上に、簡単なことだと思う。…ここで大切なことは、人間の中にある善を、信頼し続けることである」（153 頁）。これがグリューンの結論である。楽観的過ぎる、そう批判されてもおかしくはないような内容の本だ。でも、私は、この暗い時代の年の暮れに、とことんまで人間の可能性を信頼し続けるこの本に出会えて本当に良かったと思う。

本書のキーワードはおそらく「共感」であろう（「共感は、私たち人間存在の『核』である」72 頁）。グリューンは、冒頭で「戦争とは人間の問題に他ならない」と言う。「戦争を引き起こし、他者を殺すのは、常に『人間』である」（17 頁）からだ。戦争を人間の問題として捉える（当たり前のことだが）グリューンは、このように問い始める。「私たち人間をお互いに結び付ける力、つまり殺人を阻止する装置として私たちすべての者に与えられている『共感』が、なぜそこで（＝戦争で）作用しないか」（同頁）と。

以下、私なりにやや急ぎ足で要約すると、戦争を誘発し、私たちを暴力に無頓着にさせるのは「強さ」に対する欲望である。人間は不安な現実から目を背けるために「強さ」に逃避する（グリューンは人間が逃避するこの「強さ」を適切に、「男らしさの神話」、「男性的妄想と英雄神話」と表現している。23 頁、61-63 頁）。この「強さ」という幻想が、共感を、自分が殺されたら痛いし、怖いだろうから、他人もそう思うだろうという当たり前の共感をさえ、人間から奪ってしまう。まさに共感を奪われた人間が戦争を作り出すのである。

それでは逆に共感を人間の中に育むのは何か。それは自分の弱さをそのまま受け止めるという「強さ」である。見せかけの「強さ」に逃げるのではなく、また、自分よりも「弱い」人間を見下し、いじめるのでもなく、そしてつらい現実にただ耐えるのでもなく、弱さをそのまま受け止める本当の「強さ」。それは、助けて、と人に言い、お互いに協力し合うという「共同／協働的」な「強さ」でもある。「共感」という「強さ」が「人間の中にある善」だと信じ続けること、人間は誰しも「共感」を他者との協働の中で育み合うことができるのだという「夢」を持ち続けること、そのことが戦争を阻止する力となる。

さて、従って、共感をキーワードにするこの本が、子どもについての記述にほとんどの項を割っているのも当然のことである（実際、タイトルを見ないでこの本をペラペラと読んだら、子育てについての本だと思う人もいるだろう）。聖書学者の上村静さんは、「子どもは、今現在の自分の生を全肯定し、自分という存在に全幅の信頼を置いている、すなわち、『今』生かされて在るいのちを充実させている」と書いている（『キリスト教の自己批判　―明日の福音のために』）。私は、グリューンの本を読んで、なおさら上村さんの言っていることは本当にその通りだと思う。子どもは、自分の弱さを含めて自分の生を全肯定している存在であるし、そのことで他者と共感し合う自分という存

在に全幅の信頼を置いている。もちろん、チャンネルをひねればひたすらにパンチとキックの闘いごっこ、タレントの罵り合いしか流れないテレビ番組や偏差値でしか子どもを評価しようとしない管理教育が次第に子どもの共感する力を奪っていくのがこの社会の現実である。でもそんな現実の中だからこそ、「『今』生かされて在るいのちを充実させている」子どもの「共感」する「強さ」を信頼し続けなければならないのだろう。グリューンは自分の娘たちが学校に通っていた頃、戦争を想定した避難訓練に対して、「なんてバカげたことをするの！」と激しく怒った、という話を紹介している（４頁）。国会議員がどこかの誰かに「手紙」を手渡ししただけで右も左も大騒ぎするような呆れた社会の中で、「なぜ、この世界に手紙を渡してはダメな人がいるの？」と当たり前のことを問うことができる感性が当たり前に備わっているのはもはや子どもだけだろう。子どもは信頼し続けるに値する存在なのだ。

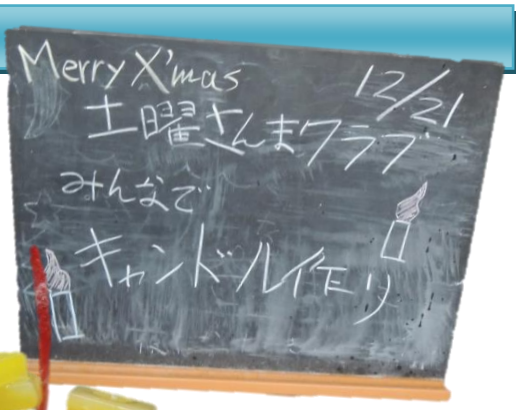
私たちNPO法人さんまクラブは法人格を取得し、来年度から、子どもへの居場所提供を手がかりとして、社会の中に居場所を作り出す事業を本格的にスタートさせる。私たちの目的は、ひたすら数字によってのみ評価され、お互いに対立させられるこの生きづらい社会の中で、生きづらさを感じている人たち（それはさんまクラブのスタッフ自身のことでもある）と共に「居場所」を作り出していくことだ。先にグリューンの述べていることを私なりに要約して、「弱さ」をそのまま受け止める「強さ」とは「共同／協働的」な「強さ」である、と書いた。「弱さ」をそのまま受け止め、互いに助けてと言い合うことのできる「居場所」。私たちがそんな「居場所」をこの地域社会に本当に実現したいと望むのであれば、それは「私たちの思っている以上に、簡単なこと」なのかもしれない。

大川大地（スタッフ）

※900円でお買い求めいただけます（理事長まで）。

土曜さんまダイジェスト　１２月２１日「ろうそく作り」

１２月２１日の土曜さんまクラブのプログラムは「ろうそく作り」。
１４人の子どもたちと一緒にいろんなろうそく作りに挑戦しました。
牛乳パックと氷で作るレースキャンドル。小さな蝋をくっつけて作るレンガキャンドル。子どもたちの「キャンドルアート」をご覧ください。



会費の納入にご協力ください

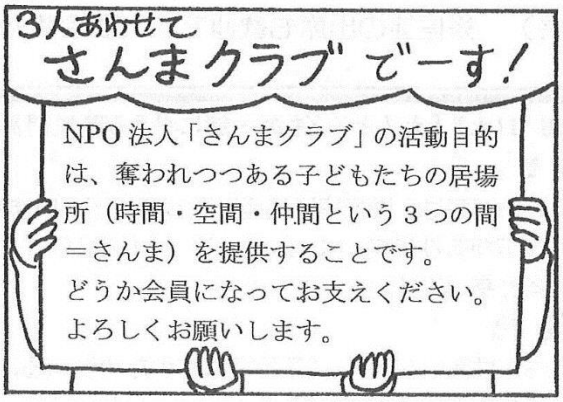
平素はＮＰＯ法人さんまクラブの活動にご理解、ご支援、ご協力を賜りまして心より感謝いたします。１２月２７日の時点で正会員・賛助会員合わせて５０名の方にご入会頂いております。さんまクラブの活動は会員のみなさまの会費によって支えられています。会費の納入がまだの方はどうぞ 2013 年度中にお願いいたします。分割払い等にも応じます。スタッフにご相談ください。郵便振替口座を作りました。振込取扱票を同封しております（口座は最後のページに記載しています）。どうぞご利用ください。

さんまクラブの予定

１月１１日　土曜さんまクラブ　「親子で餅つき大会」
　　１６日　2014 年度放課後さんまクラブ説明会（11:45　於：水口教会会堂）
　　１８日　定例スタッフミーティング
　　２５日　土曜さんまクラブ　「連凧を作ろう」
２月　１日　土曜さんまクラブ　「冬の遠足！アイスアリーナへ行こう！」
　　１５日　土曜さんまクラブ　「紙ヒコーキ大会」
　　１６日　2013 年度理事会
３月　１日　定例スタッフミーティング
　　土曜さんまクラブ　「牛乳パックで葉書を作ろう」
　　２日　**NPO 法人設立記念講演会**
　　「地域で育てる／地域が育つ」
　　（講師：桜井智恵子さん　詳細はチラシ参照）
　　１５日　土曜さんまクラブ「わたあめ大会」

編集後記

△明けましておめでとうございます。さんまクラブのニュースレター「さんま」の創刊号をお届けしました。法人の設立のご報告と本の書評を載せました。次号から連載などより内容豊かな会報を目指します。▽右の漫画は日本キリスト教団長浜教会牧師の川上幹太さん（当法人の監事）が、滋賀地区伝道協議会の『滋伝協ニュース』に連載しておられる漫画でさんまクラブをご紹介くださったものです。ご本人の許可を得て転載します。なお、川上幹太さんには次号からこの会報にも漫画を連載して頂く予定です。どうぞお楽しみに！▲３月２日に教育社会学者の桜井智恵子さんを講師にお迎えして NPO 法人さんまクラブ設立記念講演会を開催いたします。どうぞご参加下さい。▼まだまだ寒い日が続きます。そしてこれからどんどん寒くなっていきます。みなさん、どうぞお身体を大切に。今年も１年、どうぞよろしくおねがいいたします。



特定非営利活動法人　さんまクラブ

理事長：谷村徳幸
スタッフ：池田純平、大川大地、谷村耕太、造田泰
〒528-0028 滋賀県甲賀市水口町城東３－２１
Tel:080-2892-0061（大川）

郵便振替口座
口座記号番号：00910-7-202663
口座名：特定非営利活動法人さんまクラブ